

研究経過報告——'80年秋～'82年夏——

小 嶋 秀 夫

〔児童発達観の研究〕 「児童観研究序説——児童観研究の意義と方法——」(三枝・田畑〔編〕現代の児童観と教育 福村出版, 1982。第1章)が漸く出た。これは筆者のいう「真空の中の二つのブラック・ボックスどおしの関係」の研究を超えるために、一方のブラック・ボックスであるおとな(親, 教師など)の内面的要因の一つを, 実証的研究にのせうるように概念化したものである。教育学や民俗学の研究者からの反応はあるが, 筆者がなんといっても望んでいるのは, それが心理学の研究を刺激することである。それはまだ, 小さな兆しとして現れているに過ぎない。もちろん, 筆者自身もそれにとりかかるべき段階に来ていて, 一つの試みを行なった。それは母親の小グループ(4つ)による井戸端会議方式と筆者が呼ぶ自由討論の繰り返しで, 日本心理学会第46回大会(京都, 1982年7月)で報告した。

この一環としての歴史的資料の分析は, 漢籍, 江戸期の医書・随筆・農書, 明治以降の通俗的な心理学のテキストブックと雑誌などについて断続的に行っているが, 現われたのは小さいエッセイ「たちたちといひて立つ事を教ふべし——伝統的子育て論に見る育児観——」(言語生活, 1981, 3 (No. 351) ほか1編である。そのほか「17世紀中葉から19世紀中葉にかけての日本の子育ての諸概念」と題する発表を, Bandura のセミナー(岐阜, 1982年7月)で行なった。筆者の予想通り, 当時の日本の子育て論と Bandura の社会的学習理論の類似性は極めて高く, 後者が現在の日本でかなり広く受け入れられている一つの原因をそこに求めること(Bandura)は正しいかも知れない。

〔家族関係・家庭〕 「家庭と教育」(教育学大全集10 第一法規, 1982)という本を書いた。1964年に金沢大学に赴任したときに, 「将来, 家庭教育の専門家になるのではないか。」と期待してくださった方があったと間接的に聞いて, たいへん心外に思ったことはすでに白状している(1979)。この本は家庭教育自体に関するものではないが, そのときのご期待に対する今の筆者の答えにもなっている。しかし脱稿後約1年の現在, その後に読んだ多くの論文により, 早くもいくつかの付け加えたい点が出てきている。

「家族の変貌と子ども」(現代児童心理学2 全子書房, 1981〔原著1979〕)という論文集の監訳・翻訳をした。その解説にも書いたように, 何か問題があると考え

たら, 現状をより詳しく理解するための研究と効果的な対策を見出すための研究が, わが国よりもはるかに素早く, かつ大規模になされたのがアメリカである。それには研究費の出し方とともに, 現実の必要に即応できる研究者側の構えと体制が関係しており, 研究結果の内容だけでなく, それを生み出した社会システムについてもわれわれは学ぶ必要がある。

小児科の鈴木教授を班員とする厚生省の「母子相互作用研究班」に久世教授らと参加しており, 小児心身症の家族的背景に関して2回発表した(東京, 1981, 1982)。医学との境界領域で心理学が寄与すべき問題が多くあり, 心理学を発展させるためにも, われわれは積極的に参与すべきだと感じている。

家族関係の研究を進めるには, 発達研究と社会心理学との協力が必要だと思う。「家庭の社会心理学」(子どもの社会心理I 家庭 金子書房, 1982), 筆者(1978/1980)の親子の相互作用・親子関係分析のモデルの三者関係への拡張(後述のセミナーで発表)の2つは, 発達研究者の立場からの家族関係研究の視点を示したものである。

本学部教官を中心にした特定研究には, 家庭班を構成して参加しているが, そのうち母親-きょうだい-子ども(8~29カ月児)関係に関する実験法を中心とした探索研究の結果が一応出た。これは山田洋子(愛知淑徳短大)・村上京子(大学院研究生)・河合優年との共同の仕事であるが, Lewis を招いて開催した「子どもの発達と家族関係セミナー」(中津川, 1982年8月)で, 他の5つの研究とともに発表し, 11月の日本教育心理学会第24回総会で発表したあと, 論文にまとめたいと考えている。

〔発達研究の方法〕 「発達研究の方法論」(発達心理学の展開 新曜社, 1982)は, スペースの関係で中心的な骨組みだけしか示していないが, 将来現われるべき本の大枠となるはずである。また, 「発達の評価」の問題に関しては, 「社会的・情緒的発達の評価」(児童心理学の進歩, 1982, 21巻)というレビュー論文を宮川充司(学振奨励研究員)と共同で執筆した。

〔その他〕 「教育心理学研究における論理の問題をどう考えるか」と題したシンポジウムの結果(教育心理学年報第20集, 1981), 場依存性-独立性に関する河合・鋤柄増根(金沢医科大学)との研究(日本心理学会第46

回大会),「教育心理学における専門家養成の問題」のシンポジウムへの参加(教育心理学年報第21集,1982),新版の心理学事典(平凡社,1981)への執筆,「小学生

の心理(有斐閣 1981)を松田惺と編集,など。
(1982年8月末)

研究経過報告 一昭和56年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。このテーマ領域に関する近年の筆者の関心は,単一事例の“生”の取り組みを浮き彫りにし,その過程で加味した特殊治療技法(たとえばフォーカシング,夢分析など)の効果をもみようとするところにある。この年度には,心理臨床全国研究集会(第3回心理臨床家の集い)で「カウンセラーに転身を計ろうとした不惑の企業マン」と題する症例の発表を行なった。前田重治九大教授の精神分析の立場からのコメントを拝ぎ,この症例の取り組みに新しい視野を開くことができた。また依頼によってであるが,「治療面接——カウンセリング」(「教育と医学」特集面接,第29巻第11号)で,治療面接・カウンセリングの本質,機能,治療関係のなかでのカウンセラーについて論じた。

2. 心理臨床家の養成,教育・訓練問題について。

先に記した心理臨床全国研究集会が,この年度は関西地区(大塚義孝京女大,河合隼雄京大両教授ら)の世話で,12月6,7の両日,大津びわ湖畔・ホテル紅葉を全館借りきりして開かれた。これは大学院修士課程修了レベルでの教育・訓練,研修の場として,三年前からスタートしている集会である。筆者は,先に記した症例発表の他に,滝野功氏(日本心理センター)の「初回(初期)面接とその記録をめぐる」と題する研究発表での,コメントの指名をうけ,いくつかの視点を提起し,討議を巻き起こすことができた。また氏のカルテ作りの視点を学ぶことができた。

この研究集会で,新しく学会を創る要望が高まり,本学村上英治教授らとともに発起世話人として名を連ね,昭和57年3月に「日本心理臨床学会」を発足させた。かかる学会が誕生して,再び問題になるであろう課題の一つは,心理臨床家の資格,訓練の明確化であり,教育プログラムの確立と定式化である。筆者は,この問題を見据えるべく,学部学生段階での実習・演習の一つのモデルとして,半期30時間で行なわれるカウンセリングないし臨床面接法のテキストをまとめ,世に問うことにした。幸い新曜社の好意によって,出版されることになり,次年度には間に合う運びである。

3. 臨床青年心理学への接近。これは共同研究として池田博和助手らと,過去5年に涉って取り組んできている。今年度は,学部紀要に二本まとめることができた。一つは「同一性障害の症例」に関する報告(研究紀要第28巻,56・12)であり,もう一つは池田助手筆頭執筆による「対人恐怖の人間学,その1. 病例提起」(研究紀要第28巻,56・12)である。なお筆者は,この共同研究を教育学部での特定研究(教育'60年代研究)に位置づけ,投稿中である。

4. グループ・アプローチ,エンカウンター・グループの実践研究。

本学学生相談室主催の第5回自己発見のための合宿セミナーが,この年に中津川研修センターで行なわれた。昭和56年度文部省厚生補導特別企画の補助を得て,この度も無事終了した(名大学生相談室,57.3)。また過去3カ年の名大における自己発見グループの成果も所収されている成書が,村上英治教授,佐治守夫東大教授らの編集でようやく発刊された(『グループ・アプローチの展開』誠信書房,56.6,73~103頁)。これらは,大学生の自己発見,対人関係の促進・訓練のための貴重な手引き書である,と自負している。“名大方式”の提言である。

また病院看護婦集団に行なわれたグループ・アプローチもまとめることができた(永田良昭・佐々木薫編『集団行動の心理学』第11章・有斐閣,近刊予定)。

5. 特定研究「わが国における人間関係の比較的・総合的研究」では,丸井・村上両教授,池田助手らと教育臨床班を作り,シンポジウムをもち,それを踏まえて,名古屋市内小・中学校を対象に「教育臨床場面における人間関係の研究」を行ない,目下資料整理中である。

6. 1981年度世界精神衛生連盟・マニラ会議への出席。

7月27日から8月1日まで,マニラ国際会議場を主会場として開かれた会議に,出席する機会を与えられた。前年度の国際心理学会議と同様に,精神衛生をめぐる諸現実について,見聞を広めることができた。特に,途上国のこの問題に対する関心の強さと熱意・エネルギーに